

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 7 日現在

機関番号：32525

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26893257

研究課題名(和文)重症心身障害児者通所施設看護師の実践能力向上支援方法の開発にむけた基礎的研究

研究課題名(英文)Survey of nursing practice in day care facility for profound and multiple intellectual Disabilities

研究代表者

市原 真穂 (Ichihara, Maho)

千葉科学大学・看護学部・講師

研究者番号：70736826

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：在宅で生活する医療ニーズの高い重症心身障害児(者)(以下重症児)が増え、障害福祉施設を利用する機会が増えている。障害福祉施設において重症児の健康状態、医療ニーズとその看護の実態を明らかにし、看護師が利用者の体調を維持・管理していくための具体的な看護支援を検討した。約40%の看護師が、身体管理や他職種との連携において困難経験していた。また、「通園施設で医療的ケアを行うことができる看護職者の不足」「主治医不在の通園で医療ニーズの高い重症児への医療的ケアを行うことへの葛藤」等が抽出され、これらの結果を基に、看護師の実践能力向上支援方法の具体化が必要である。

研究成果の概要(英文)：The aim of this survey was to clarify the nursing practice in day care facilities for Profound and Multiple Intellectual Disabilities (PMIDs) and to discuss educational needs for nurse in there to improve PMIDs' QOL. A mailed self-administered questionnaire survey and semi-structured interviewed were held. Major findings were as follows. 39.7% of answerers had multiple difficulties, such as 'lack of clinical competency to distinguish health state', 'lack of sense of sharing medical information', 'confusion of different value between professions with medical background and welfare education'. Nurses had educational needs which were facilitating clinical judgment competency and constructing clinical collaboration in each settings.

研究分野：小児看護学

 キーワード：重症心身障害児(者) 日中活動支援 通園(所)施設 危機管理 看護実践能力 緊急時対応 事故防
止 福祉施設

1. 研究開始当初の背景

在宅生活する重症児は全国で 25000 人程度との報告があり、重症児の在宅医療を支える訪問診療、訪問看護、レスパイトサービス等の医療的支援システムは整備されつつある。しかし、在宅重症児支援は医療サービスだけでは不十分であり、福祉サービスと連携・協働した年齢にふさわしい日中活動支援、地域生活支援が重要であると指摘されている。特に未就学児、特別支援学校卒業後の通所型の日中活動支援は十分に整備されているとはいえない。医療的ケアが必要な重症児の日中活動支援施設や生活介護施設の受け入れに限界があるといわれ、その理由の一つに、ケアを担う看護師の確保の困難が挙げられる。設置基準においても看護師配置が明記されていないこともあり、小～中規模の施設であれば看護師の複数配置は困難である。医師が常駐しない通所施設の看護師は、利用者の日常的な医療的ケアから状態悪化時の対応まで担わなければならない、負担が大きいことは容易に想像できるが、スキルアップにむけた研修等の機会も十分に準備されておらず、研修の方法論を追及した先行研究もない。また、成長や加齢に伴って健康状態が変化する重症児のケアは、長期的な見通しを持ち、状態悪化を最小限にすることが長期に在宅生活を続けるために重要な要素であり、日常的な関わりの中での提供が効果的である。よって、日常的に関わる看護師がキーマンであると言え、利用者を取りまく医療、保健、福祉スタッフによるケアをマネジメントすることが重要である。しかし、障害福祉サービス整備に関して看護師配置の提言等はされているものの、具体的な看護ケアについて実態に基づいて検討された報告は見当たらず、日中活動支援施設（旧通所施設）における看護の実態を明らかにし、それに基づき必要な知識やスキルを整理していくことは喫緊の課題であるといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、施設を利用する重症児の健康状態、医療ニーズとその看護の実態を明らかにし、通所型障害福祉施設に勤務する看護師が、利用者の体調を維持・管理し、体調変化に速やかに対応するために必要な知識やスキルを抽出し効果的な教育内容の示唆を得て、重症児が QOL を保ちながら在宅を続けていくための看護支援を考察することである。

3. 研究の方法

本研究は、通所型の障害福祉施設における利用者の健康状態、医療ニーズ、および看護の実態を明らかにし、通所型障害福祉サービス施設に勤務する看護師の実践能力向上にむけた支援方法を検討、開発することであり、次の 2 つの研究から構成する。

【研究】(平成 26 年度)

通所型障害福祉サービス利用者の健康状態、医療ニーズ、看護の実態に関する量的な調査。

対象：全国重症心身障害日中活動支援協議会ホームページに公表されている通所型の障害福祉サービス事業所約 250 件に勤めている看護師

データ収集方法：郵送による自記式質問紙法

調査項目：事業所の概要、利用者の特徴（重症度、医療的ケアの内容等）、急変等の急激な体調変化等の事象の有無とその対応方法、看護師の背景、実施している医療ケア、ケアに関する困難、遭遇した急変とその対応状況、職務満足度、看護師の QOL

データ収集手順

- 1) 自記式質問紙等の作成(平成 26 年 8 月～9 月)
- 2) 質問紙の郵送・返送(平成 26 年 11 月)
- 3) データ分析(平成 27 年 1～3 月)

【研究】(平成 27 年度)

通所型障害福祉サービス施設に勤務する看護師(6 名程度)の看護の実態、実践上の困難に関する質的な面接調査を行う。研究において面接調査にご協力いただける看護師を募り、引き続き研究を実施する。

対象：通所型障害福祉サービス事業所に勤務している看護師。自記式質問紙に面接調査への協力の可否を回答する欄を設け、研究協力者を募る。研究協力の応募が少ない場合はネットワークサンプリングにより選定する。

データ収集方法：半構造化面接法

調査項目：施設の概要、看護師経験年数、重症児ケアの経験年数、職務上の困難、重症児ケアで困っていることや学びを深めたいところ、遭遇した急変とその対応状況、職務に対する思い等

データ収集手順

- ・面接ガイドの作成
- ・所属研究期間への倫理審査申請
- ・研究協力希望者が所属する施設へ研究協力の依頼
- ・研究協力施設へ出向き面接調査。面接は許可を得て録音し、逐語録を作成する。

分析方法：逐語録から、重症児ケアで困っている点や学びを深めたい点について、質的・帰納的に分析する。分析の真実性を確保するために、複数の重症児ケアの経験がある看護師や、小児看護専門看護師と分析結果を解釈が一致するまですり合わせる。結果に基づき、看護師の教育内容を焦点化し、看護師への教育的介入方法を考案する。

4. 研究成果

1) 結果概要

回答者が所属する施設の概要を表 1～表 4 に示す。

表1 所属施設の設置主体

設置主体	件数(人)	割合
公立	14	21%
法人	50	74%
その他	1	1%
無記入	3	4%
合計	68	

表2 所属施設の運営主体

運営	件数(人)	割合
公立	8	12%
民営	44	65%
その他	8	12%
無記入	8	12%
合計	68	

表3 直接関わる職員の構成

職員	件数(件)
常勤医師	26
非常勤医師	26
看護職	65
保育士	53
介護福祉士	34
ホームヘルパー	17
その他	28

表4 サービス内容

サービス内容	件数(人)
重症心身障害児を主体とした通園施設	48
未就学児を対象とした通園施設	21
特別支援学校卒業後の方を対象とした通園施設	12
知的障害児の方を対象とした通園施設	5
放課後児童デイサービス等の他のサービスも行っている	24

回答者の概要を表5～表10に示す

表5 回答者の年齢

年齢	人数	割合
30代	11	16.4%
40代	25	37.3%
50代	28	41.8%
60代	3	4.5%

表6 臨床経験年数

臨床経験	人数	割合
1～4年	6	9.2%
5～9年	4	6.2%
10～14年	13	20.0%
15～19年	14	21.5%
20年以上	28	43.1%

表7 現施設での経験年数

現施設での経験	人数	割合
1～2年	10	15.2%
3～5年	15	22.7%
6～8年	10	15.2%
9～11年	13	19.7%
12年以上	18	27.3%

表8 障害児者福祉施設での経験年数

障害児福祉施設での経験年数	人数	割合
1～2年	10	16.1%
3～5年	12	19.4%
6～8年	10	16.1%
9～11年	10	16.1%
12年以上	20	32.3%

表9 以前の経験

以前の経験	人数	割合
一般急性期	41	38.3%
その他	18	16.8%
重症児者施設等	10	9.3%
その他福祉施設	9	8.4%
診療所・クリニック	15	14.0%
訪問看護	3	2.8%
その他	11	10.3%

表10 教育背景

教育背景	人数	割合
専門学校卒	52	78.8%
看護系短期大学卒	9	13.6%
看護系大学卒	1	1.5%
看護系大学院修了	1	1.5%
その他	3	4.5%

2) 成果

研究成果については、学会発表および学術誌への投稿を予定しており、以下に概要のみを示す。

(1) 日中活動支援を行う障害福祉施設において重症心身障害児者のケアを担う看護師の実践上の困難と学習ニーズ

261施設に質問紙を郵送し68件(回収率26.1%)が返送された。回答者の年齢は、「50歳代」が一番多く28名(41.8%)で、次いで「40歳代」25名(37.3%)であった。「臨床経験20年以上」が28名(43.1%)、現施設での経験年数は、「12年以上」が最も多く18名(27.3%)であった。現施設前の経験では、「一般急性期病院」41名(38.3%)が最も多かった。教育背景は「専門学校卒」が52名(78.8%)であった。利用者の概要は、未就学児の利用者の38.4%に医療的ケアがあり、9.5%が超重症児であった。18歳以上の利用者の33.5%に医療的ケアがあり、11.8%が超重症児であった。「急変や緊急事態への遭遇経験」は43名(63.2%)が「有」と回答した。自由記載では「呼吸状態の悪化」が26件であり、そのうち心肺停止に至った事例が2件あった。「身体状況の把握やアセスメントに困難を感じた経験」は39名(57.4%)が「有」と回答した。自由記載では「正常と異常の判断の困難」が11件であった。重症児者をケアするにあたり深めたい学習内容として42名(61.8%)が「救急時の対応」と回答し、次いで、35名(51.5%)が「生活・障害・家族を支える看護」

と回答した。

臨床経験の豊かな看護師がケアを担っているにも関わらず、重症児者特有の状態把握に困難を感じ、救急時対応の学習ニーズの高さが明らかになった。一方で、重症児者を包括的に支える看護ケアのニーズもあった。これらの点に焦点を当てた実践能力向上への支援の検討が示唆された。(本結果は、第36回日本看護科学学会学術集会での発表を予定している)

(2) 日中活動支援施設に勤務する看護師が認識する施設内外における連携上の課題

「他職種との関わりに困難を感じたか」という質問では27名(39.7%)が「有」と回答した。自由記載内容は「基礎知識の相違」「体調に関する判断の相違」「危機管理意識の相違」「日常生活ケアと医療ケアの認識の相違」であった。「急性期医療や地域の専門職との関わりに困難を感じたか」という質問では17名(27.0%)が「有」と回答した。自由記載内容は「訪問看護や他利用施設との連携」「かかりつけ医以外の救急搬送時」「新たな医療ケア導入メリットに対する医師との認識の相違」であった。重度化する利用者の状態管理に対して連携に困難を抱きつつ責任を負う看護師の実態が明らかになり、重度化に伴う他職種への教育的な役割も示唆された。(本結果は、第42回日本重症心身障害学会学術集会での発表を予定している)

3) 重症心身障害児(者)の日中活動支援に関わる看護師の思い

医療ニーズが高い重症心身障害児(者)(以下、重症児(者))の増加に伴い、日中活動支援に関わる看護師の負担は増大していると考えられる。そこで本研究は、重症児(者)の日中活動支援に関わる看護師の思いを明らかにし、看護師への支援や教育内容を考察することを目的とした。研究対象者は、重症児(者)の日中活動支援に関わっている看護師6名で、データ収集期間は2015年9月~12月であった。研究デザインは質的記述的研究で、半構成的面接法によって収集した内容をデータ化し、コード化、カテゴリー化した。本研究は、所属大学の倫理委員会の承認を得て行った。

研究対象者が日中活動支援に関わっている年数は2年~14年であった。日中活動支援において看護師が行う主な医療的ケアは、気管切開管理6件、経管栄養6件、人工呼吸器管理4件、中心静脈栄養2件などであった。看護師の思いとして、【主治医不在のなかで医療ニーズが高い重症児(者)へ医療的ケアを行うことへの葛藤】【主養育者である母親との関係性の難しさを感じる】【日中活動支援は重症児(者)の生活の質を大事にしている場である】【異なる視点をもつ他職種との

協働の必要性を感じる】【重症児（者）のニーズを見極め対応を変えられる日中活動支援にやりがいを感じる】【日中活動支援における看護師不足を感じる】【同僚からの慰めがあるからやっていける】【日中活動支援の充実・拡大・役割の明確化をしてほしい】の категорияが抽出された。

研究結果から、日中活動支援に関わる看護師が重症児（者）に関する詳細な情報を把握し、病院の医療従事者や訪問看護師と重症児（者）に関して共通の認識をもつことで、重症児（者）やその家族へ提供する医療の質の向上につながり、また日中活動支援に関わる看護師の葛藤も軽減されと考えられた。（本結果は、第42回日本重症心身障害学会学術集会での発表を予定している）

5．主な発表論文

なし

6．研究組織

(1)研究代表者

市原真穂(Ichihara, Maho)
千葉科学大学看護学部看護学科講師
研究者番号：70736826

(2)研究協力者

下野純平(Shimono, Junpei)
千葉科学大学看護学部看護学科助教
研究者番号：00782476